

岡山県消団連会員の岡山県生協連「組合員活動交流集会」のご紹介

(文責) 岡山県消費者団体連絡協議会

2月1日(水)開催の岡山県生協連の「組合員活動交流集会」は170余名が参加しました。東日本大震災被災地からの報告として岩手県消費者団体連絡会などから報告をいただきましたのでご紹介します。

■「東日本大震災」被災地からの報告

岩手県消団連 事務局長 伊藤 慶子さん

被害はなかったけれども、ライフラインのストップで、沿岸部の惨状について情報が当初得られず、灯油がなく寒さに耐え、ガソリンがない状況。伊藤さんは、住居も仕事も盛岡市周辺で内陸。大きな最初の2週間は、自分たちの生活を守ることで精一杯になり、被災地を思いやる余裕がない“空白の2週間”だった。重油や軽油の不足により、食料の加工や運搬が滞り、食料自給率110%の岩手でさえも主食の米までもが店頭から消える事態となった。牛乳は搾っても殺菌ができず捨てられ、餌が手に入らない養鶏場では鶏が餓死した。燃料の確保が今後の大きな課題である。



後方支援マニュアルの整備を・・と伊藤さん

被災地への支援では、岩手県消団連は「いわて食・農ネット」の事務局として、陸前高田市で食事づくりの支援を続け、いわて生協も食事づくりや炊き出しなどで支援を行った。被災者は希望した全員が仮設に入居し、表面的には落ち着いた生活ができています。しかし、入居が夏だったため、配布された布団が薄かったり、寒冷地仕様でない仮設のため、厳しい寒さのなかで耐えている。厚手の布団や灯油も配達されるなどしているが、全部にゆきわたっているわけではなく、難儀しているのが実態だ。閉じこもる高齢者が問題になっている。

被災地では事業所の再建がすすまず、雇用もない状況が続いている。2年間の期限付きの仮設住宅を出るための生活設計は、まだまだ、これから、という状況。岩手県は広く、盛岡から沿岸部までは車で3時間もかかる。沿岸から1時間の遠野市が、今回、後方支援に徹し、被災地救援の本拠地となった。日頃から沿岸部に事が起こった場合の「後方支援マニュアル」を作っていたのでスムーズに対応できたとのこと。今後、東海・東南海・南海地震が予想されている。沿岸や近県を、後方で支援するシステム作りが重要だと痛感した。南海地震では、後方支援としての岡山県の役割は大きいと思うし、期待している。

■「東京電力福島第一原発事故の影響を受けて」子ども未来・愛ネットワーク 大塚 愛さん



大塚さんは岡山県に生まれ、大工になることと、自給自足ができる生活を夢見て、福島県の川内村で暮らしていた。

機械を使わないで1反の農地を耕し作物を育て、薪で炊事をし、暖をとる。近くの清流から水をくみ、子どももあそび。太陽光発電で電気を賄う。自分たちの井戸を掘り、夢が叶い、大自然の中で、家族4人で幸せに暮らしていた。

しかし、3月11日以降、暮らしは一変した。地震による家の被害は無いに等しかったが、自宅は原発からは約20kmの距離。放射能汚染の心配から、その日の夜、川内村を離れた。会津、それから北陸道を通って、実家のある岡山に避難してきた。福島県の川内村にいた時は、毎日やることがあったが、岡山にきて何もなくなってしまった。しかし、子どもたちを放射能から守るために、原発なしで暮らせるように、今できることをやっていきたいと思うようになり、「子ども未来・愛ネットワーク」をつくって、避難してくる人のサポート活動(住宅募集、仕事紹介等)を行っている。

■「コープぼうさい塾」(MAP シミュレーション)



日本生協連中央地連大規模災害対策協議会世話人である水島 重光さんをファシリテーターに、日本生協連作成の冊子『ようこそコープぼうさい塾へ』をメイン資料として、15グループに分かれて演習を行った。

ぼうさい塾の終わりには、出席いただいた岡山県危機管理課の参事、岡山市消防局の参与からそれぞれの立場でコメントが述べられた。